秋田県立博物館研究報告第24号　19～36ページ　1999年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.24, 19－36, March 1999

館長館話実施報告抄（２）

新　野　直　吉*

１．須　磨　弥吉郎　　２．白　瀬　矗

はじめに

平成10年度にも前年度と同じく「館長館話」では、「秋田の先人」と「真澄からの連想」の２シリーズを行った。「先覚記念室」と「菅江真澄資料センター」に因む館の活動の一つとして実施したものである。５月17日（日）東海林太郎・６月12日（金）須磨弥吉郎・６月21日（日）和井内貞行・７月３日（金）白瀬矗・７月12日（日）井坂直幹。８月７日（金）「ひよしまつり」から・８月30日（日）「秋田の賊地」から・９月11日（金）「星野宮」から・９月20日（日）「をろしやのをどり」から・10月９日（金）「うしいし」からの10回であった。

その中から、秋田が生んだ豪気の外交官須磨弥吉郎公使と、稀代の克己探検家白瀬矗中尉という二人の先人を見つめた２回分について話し言葉を文章化し若干の整理を行ってここに報告するものである。

須磨弥吉郎

明治25年（1892）９月９日南秋田郡土崎港町土崎湊新城町に、父須磨八十八と母カネ（兼）との長男として弥吉郎は生まれた。明治32年（1899）数え年８歳（以下年齢は数え年）で土崎男子小学校に入学し、13歳の９月９日誕生日に、祖父古仲清廉から「刀は斬るほど冴える。人間の魂も同様だ。魂で働けよ」と言う教訓を受ける。自ら『一刀魂』の教訓となづけたと『とき（須磨日記）』（とき編纂会・昭和39）にある。「とき」は朱鷺などではなく《時》の意である。その庭訓が長くこの快男児外交官の精神構造に作用した如くであるが、古仲家は男鹿半島北浦の士族であった。幕末に海岸に配備された新武家の北浦表町の隊士に古仲亘の名がある（『秋田沿革史大成』）ので、この古仲家であろう。18歳で結婚した母は翌年長子弥吉郎を生んだことが、子息未千秋氏に頂いた「祖母兼さん」という弥吉郎のエッセイでわかる。

明治38年（1905）小学校を卒業し、同40年４月８日秋田県立秋田中学校に入学特待生であったと外務省の履歴書にある。同45年（1912）３月21日卒業、翌大正２年４月８日秋田県知事の推薦で広島高等師範学校に入学英語を修めることになり、山中高等女学校教諭山田はな（華）という女性と結婚する。相手は、未千秋氏から館長宛の書翰によれば「弥吉郎があれ丈になりましたのは全く小生の母はなのお蔭でありまして」と評価される才媛である。同氏の『私の見た母聞いた母』（創元社・平成３、以下『母』と表記）なる佳著によると、はな夫人は長野県下諏訪の出で、長野高女を卒えて女子高等師範学校に入学地歴科を修め明治37年（1904）３月卒業、翌年県立福島高女に勤務した後、43年９月１日山中高女教諭に転じ、大正５年（1916）依願免職になっているという。大正２年から５年の間に２人は邂逅した訳である。

教員になる気のなかった須磨が学生の自由論談会の木曜会を興したり、政談演説をしていたのに対し山田が「生意気」と評し、須磨が反発したことから交際が始まる。女性が７歳の年長なのでプロポーズを仲々受けず、結局「酒と女で迷惑かけない。子供の教育は一切まかせる」という約束で結婚に漕ぎ着けたのだという。高師退学は５年１月27日で、校長は教育の学校で政治を志すのを「怪しからぬ」と申渡した由である。２人は妻の実家に身を寄せた後に上京、貧しいながら何も怨まず快活に努力する生活態度で、９月中央大学英法学科入学（履歴書には特待生とある）、更に翌６年（1917）東京帝国大学文科大学選科（英文）に入学した。

*秋田県立博物館

この頃のことにも触れた『須磨弥吉郎氏の面影』（中央大学八年会・昭和48）なる資料がある。執筆者は「私は中大の学生時代の同窓としてその交友を辱うした」と「はしがき」で述べる馬越旺輔という政界関係の人で、文題は「故須磨弥吉郎氏の思い出」であるが、続きを抄出して紹介すると「その輪郭の雄大なるその行動半径の宏遠なる稀に見る逸材でした。即ち学は古今東西に亘りその思想深遠雄弁宏辞行くとして可ならざるはなしでした。又審美眼抜群にして自らも書画をよくし、その一生をかけて蒐集したる幾多の美術品は汗牛充棟も啻ならず所謂須磨コレクションとして美術愛好者の垂涎措く能はざる次第でした。晩年スペイン公使当時仝地で蒐集した逸品を挙げてスペインと歴史的に縁故最も深き長崎県に寄贈したのは普く世人の知るところです」と賞賛している。述べるところは、決して空虚な美辞麗句ではなく、これから語ろうとする館話の主人公像を最も明快に表すものだと考える。本文に入り中大時代の須磨氏について述べるところでは、壮年以後は体重弐拾四、五貫もある堂々たる偉丈夫だったが、学生時代は細面の痩せ形で冬は常に和服姿で赤狐の襟巻きをしているのが誠に印象的だったと述べる。代議士時代に望み見ただけの経験からは不思議でもあるが、『母』巻頭の広島における結婚写真を見れば正しく真実で、瀟洒な和服姿だったに違いない。

また、英法科だったが独乙語にも熱中していたこと、「辞達学会」と称した中大弁論部で活躍し雑誌『青年雄弁』（早大出身西岡竹次郎主宰）で語学の天才が中央大学に現われたと激賞されたことを述べる。竹次郎は西岡元文相の父親である。ここで「京都帝大の文科（選科）にも学んで英文学の蘊奥を究められその後ドイツ語と中国語とスペイン語までもマスターし正に語学の天才」であったと記しているが、先に述べたように京大ではなく東大である。しかし学友が京大と誤った理由には、須磨が広島高師を止めて京大に入ろうとしたが妨げられたというような表現をした資料もあるから、学生時代「広島から京都に行こうとした」などと語ったことが、半世紀後の学友の記憶として文章化されてこうなったのかもしれない。

文の「むすび」には、「その政界にデビューするや学生時代中大の弁論部辞達学会で鍛えた雄弁を提げて議政壇上を圧倒したのでした。私とは旧東京市議として熟知の間柄であった社会党の委員長故浅沼稲次郎氏は私に対し口を極めて須磨氏の威風堂々の貫禄とその雄弁宏辞とを激賞して居ました」とあり、更に「長男未千秋氏はタンザニア駐在大使としてその衣鉢を伝えられ更に累進して香港総領事としてその令名を謳われ二男和章氏はアジア銀行マニラ駐在員として……総裁のブレーンたり、未亡人はな女史は八十有余歳の高齢を以て須磨家の柱石となり常に故人の遺志を重んじ矍鑠として家族一同鞭撻督励して居られるのは頭の下る計りです」と述べる。そして本文中には夫人について「青年須磨氏が脚光を浴びて外交の桧舞台に乗り出したのはその御夫人須磨はな女史の内助の功が誠に絶大であった……はな夫人は典型的な良妻賢母であって弥吉郎氏の学生時代には旧制女学校の教諭として教壇に立ち全力を挙げて後顧の憂なからしめたのです。私は大正六年頃東京市外戸塚町の源兵衛町の寓居を尋ねましたがその当時は水道もなく井戸の手押しポンプに須磨氏の妹さんがすすぎ洗濯をしていたことを覚えています。蛟龍遂に池中のものにあらず、花々しくデビューしたその背後の内助こと（そ）特筆大書して称えるべきでしょう。…山内一豊の妻の美談を髣髴せしめるものがあります」と絶賛の辞を綴っている。

また須磨弥吉郎の外務省勤務のあたりについても側にいた人として、「大正七年須磨氏は在学中に高文に合格されました。そして松本烝治先生（終戦当時幣原内閣の国務大臣で憲法担当、商法の大家今は故人）の紹介で外務省の事務官となられました。……そして翌年の大正八年秋には外交官試験に優秀の成績で合格せられたのですが、このとき一つのエピソードがあります。英会話ではその道の第一人者電信課長の幣原喜重郎氏が試験官として現われましたがその幣原氏さえ須磨氏の流暢な英語には舌を巻いて驚いたとのことです。そこで勇躍して直に外交官補としてロンドンに赴任せられたのでした。その上司には確か後の首相吉田茂氏もいた筈です」と描写している。実際彼の履歴書に依って見ると、それを裏づけることが

できるのである。

７年10月25日高等試験行政科に合格、家庭では長男未千秋が生まれた。夫人は香蘭女学校に勤めていた。８年２月東大選科は退学し、７月20日中央大は卒業した。10月高等試験外交科に合格外務省事務官条約局第一課勤務となり、９年には次男和章も生まれたが、11月15日に母かねを失った。大正10年（1921）30歳の須磨は３月５日外交官補に任ぜられ英国勤務を命ぜられる。東京出発は５月13日、到着は７月18日であった。晴舞台で11年12月大使館三等書記官に任じられ、翌年１月26日独乙在勤を命ぜられ２日後に倫敦発、３月１日着任し、下諏訪に帰郷していて赤いスカートの外交官夫人として評判であった夫人は、５歳と３歳の両子息を伴い２カ月の船旅で独乙に旅立つ。広島で結ばれてから７年を経て勇躍夫の任地に向ったことであろう。当時のドイツは第一次大戦後のインフレ期で外交官の生活費には余裕があったものと思われる。「我々兄弟二人は子供だから、すぐにドイツ語を覚えドイツ語で喧嘩をするようにもなる」という未千秋氏の文章はそれを如実に物語る。故郷を思うという意味の土思子という妹の生まれたことも同氏の著書にある。

ところが大正13年１月25日に帰朝命令が出て、７月18日に伯林を出発し９月22日に東京に着いた。その際のことについて父親自身の書いたものには

長男は次男和章と共にドイツに一年半も居た。其の間に学齢が来た。到頭二学期近くも遅れて、東京戸塚小学校に入るのであった。欧州から帰る「ロンドン」丸という船の中で妻も自分も長男の物覚えの悪いのに泣くのである。－中略－

考えて見れば長男は一年半の滞欧で、ドイツ語が立派に出来るのであった。彼はドイツ語で考えもしていたのに、急に日本語で、算術、読方を入れようと云うのだから無理だったのだ。そうした事に気付いたのは余程後であった。

とある。帰国子女の問題は当今生じたのではなかった。府立一中・一高・東大法と進み名外交官になる秀才長男に対し、大正の父母もかく案じたのである。12月26日欧米局第二課勤務となった。

大正15年（1926）６月海外諸国への出張があり、昭和２年（1927）４月に第二課長代理の執務をし、10月公使館二等書記官に任ぜられ、中国在勤を命ぜられて、11月12日東京発23日北京到着となる。衛藤審吉亜細亜大学長が、外交官試験に合格した役人が欧米語はよく勉強するのに、中国に駐在しながら、会話の出来るほど中国語を学んだ者がいない中で、「ただ一人例外は、現スペイン駐在公使須磨弥吉郎氏のみ」と、昭和16年４月に第一高等学校の麓保孝先生（漢学者）が教室で天下の一高生たちにやや声をはげまして語られたということを、『須磨弥吉郎外交秘録』（創元社・昭和63）の「はしがき」に記している。さらに衛藤学長は「本書に収める文章はいずれも須磨氏個人の名で執筆ないし発表したものであり、駐在地からの公文、公信は含まれていない。それだけに、古今の歴史を通じ、洋の東西に視野を広げた彼個人の世界情勢分析、祖国日本の内政外交への痛憤、ことにそのリーダーシップの混乱と拙劣さへの非難が、遠慮会釈なく筆先からほとばしっている。もちろん第一線に挺身した気鋭の外交官が書き遺した、記録としての資料価値も高い。しかし同時に、気宇壮大な卓見の快男児が後世の知己に訴えた経世の書としても、きわめて意義深い」と述べ、「もう半年も前のこと、わが敬愛する先輩須磨未千秋氏が、御尊父弥吉郎氏の遺稿をたずさえてわざわざお訪ね下さった。一読して、公刊されるよう強くお勧めした」と書いているのである。大外交官の識見の高さが、大陸生まれでアジア政治外交史に詳しい国際政治学の著名学者の文章によってひしひしと伝わって来る。この書に収められた「満州時局対策要綱」なる昭和６年11月稿の論説を読むと、軍首脳に該論の理解者が１人でもいたらと切に念う。

昭和５年（1930）１月に広東駐在領事に任ぜられ、２月５日当時の北平出発10日東京着、３月２日東京発12日広東に着任した。この時数え年39歳で、世の中ではロンドン海軍軍縮条約成立・ガンジーらのインドの反英運動顕在化・浜口首相狙撃等があった。欧州はヒットラー躍動前夜で、日本でも軍部台頭の兆が著しい段階。中国通の実力ある領事の活躍する場面が多かったに違いない。

「満州国」建国宣言があり、五・一五事件が起こり、ナチスがドイツで第一党になるような中で、

昭和７年公使館一等書記官として上海勤務となる。アジアのみか世界情報の中心上海での活躍の成果は推察するに余ある。８年には３月日本が国際聯盟を脱退、10月にはドイツも脱退した。須磨は12月総領事として南京勤務を命ぜられ、翌９年１月には公使館一等書記官兼任となる。「満州国」が帝制を樹立したが、国際情勢の深刻化は一層進む。

昭和11年（1936）になると、二・二六事件があり、ドイツのフィンランド進攻、イタリアのエチオピア併合宣言、日独防共協定成立、西安事件発生などのことが続き、中国を舞台とする外交も多事であったと考えられる。45歳の須磨は12月２日父八十八（68歳）を失った。父は一家を挙げて息子の新築した東京の家に同居していた。

大正７年生まれの未千秋氏は「八十八翁（といっても、まだ五十歳代ではなかったろうか）は事実上破産して、私が小学校三年の頃（昭和二・三年）父弥吉郎が今まで役所勤めで方々に借家を転々とした後、荻窪に家を新築して居を構えた頃、次男弥太郎、長女欣子を除く克子、金八郎、定枝、政廣を引き連れて移って来た」（『母』）と述べている。須磨自身は「六造（未千秋氏によると須磨の自称仮名の由）の母兼は大正九年秋田で若くして他界した。東京から未千秋を連れて帰郷したが、その死に目には会えなかった。兼はそれこそ忍従と苦難の一生であった。唯最後に六造が外交官になっていること、すでに未千秋という長男を儲けていることを知り、安堵して死に就くことが出来たろう事が六造にとってせめてもの慰めであった」と切実な記述「男鹿半島。古仲清廉」（須磨文書）をしているが、生まれた須磨家については「四十歳漫録」というものに「逆境続きの貧商の家に生まれ、親戚、故旧殆んど大抵無理解非法なる雰囲気に育ち乍ら、兎に角今日を致した所以のものは、物質的には勿論何物もない」と書いているという（『母』）。何物とは「恩恵を受けた何ほどかの物」というほどの意味であろうから、父八十八への尊重度も自ずから見えて来よう。

新築した長男宅に居候したような実情を孫は「祖父八十八は離れ座敷に住んで、秋冬の寒くなる頃よく小さな火鉢を両手で囲んで、口を半ば開けてポカンと庭を眺めていた。敗軍の将とあれば致し方なかったろう。あまり口も利かず、父も積極的に話しかけることもなかった。ただよい美術品が手に入った時は『お爺ちゃんを呼んで来い』と言って祖父にそれを見せていた。〝貧商〟の元骨董屋にも鑑識眼は残っていたらしい」と、『母』に書いている。更に続けて義父一家を迎えたはな夫人の「サア大変だ」ぶりを描写している。すなわち、屋敷の300坪余は借地、建坪105坪の家も外務省厚生課のローンで、広大だが経済的に余裕のない家に四義弟妹を引連れた義父が同居し、次女克子が大正15年に秋田で女学校を卒えていたので家事手伝いが可能ではあったが、下の弟妹は長男と一緒に桃井第一小学校に通い、上の義弟は中央大学夜学に通うという構成の家族拡大に遭遇したのに「皆を自分の子供と同じように扱うつもり」と宣言した。女丈夫は続いて「子供達に毎朝やっているように皆にまで卵を一つ宛つけるわけには行かない」と附説したというくだりを読み感心した。この割切った言葉は夫人の信州人らしい理論性を表しており、それを淡々と書いた未千秋氏の文にもそれを観取できるからである。理論よりも〈まあやれるところまで暖かくやろう〉と有耶無耶になり兼ねない秋田的情緒を、完全に越えている。未千秋氏は続けて

> 当時はやはり女中が一人二人おったろうが、これだけの人数がいっぺんに食事はできない。二回に分けて食事をした。母はこの新来の合流軍に対して、前記の卵以外、別に自分の子供達の扱いと差別したことはない。しかし八十八翁は皆と食事をともにしていても、終始黙っていて〝居候三杯目にはそっと出し〟というようなことはあったかも知れない。我々はお爺ちゃまにできるだけ気がねさせないよう心掛けていたが。夏には芝生を刈らされて汗ダクになり、離れで一呼吸入れては「ママが怖いから」と洩らしていた。祖父は秋田の人の常であるが、若い時からよく酒を呑んだらしい。朝から酒をあおって気が向かないと、刀の背の方で祖母をぶったりしたとか。
>
> ある時母が不在の時こっそり叔父叔母に命じたのか、酒を呑んだのはよいが、ひっくり返って大騒動になった。その後はこの怖い「ママ」

の監視の目がいっそう厳しくなったそうだ。

と書き、更に須磨の弟弥太郎が嫂のはな夫人に後年手紙を書いて「須磨家へ来た姉さんはどんな横車を押してこれまで参りました」といったエピソードも書いているが、秋田イズムに対して信州イズムはしばしば横車に見えたのかもしれない。秋田と信州の差は別としても、嫁姑（この場合は舅で、女性同士ほど尖鋭化はしないが）の問題は何も長寿時代の新世相ではない。むしろ旧時代において、まだ大年寄でもない義父に心身に動きを与える芝刈りの仕事を割当てるようにしたのは、賢夫人でもあり良嫁でもあると感ずる。

ここで十数年前に読んだ飯島耕一『夢の過客』の文章を思い起こした。すなわちそれは

五十代後半、六十代の祖父と一つ屋根の下で暮したが、忙しそうにしている祖父、立ち働いている祖父を見たことがなかった。黙々と林業雑誌の整理をし、晴れとか雨とか来信ありとかの日記をつけ、碁を打っている。

祖父は古ぼけた湯沢木工のように、いつもうずくまっていた。かつては料理屋で気勢をあげると、若者たちを引連れて、また家で飲みなおした人が、縁側から外を見ていた。

という文章である。火鉢で手を暖め、庭を眺めていた須磨家の祖父と同じく、飯島家の祖父も秋田の人で、湯沢で木材の仕事をやっていたのである。その点については

どんな経緯で、祖父はこの町で事業に失敗した－中略－次いで東京でもビールの友で失敗し、破産状態となって、二人の末の男女の子供を連れて四人で岡山のわたしの両親の家へやって来たのだった。明治５年生れの秋田の人が五十過ぎてはじめて岡山という南の町で暮すことになったのだった。わたしがまだ二つか三つの時だった。それから十数年が経って、昭和二十年八月の敗戦のわずか数カ月前に祖父は眠ったまま死んだ。

祖父の病気は老衰と言うだけで、病床についてはいたが、さして苦痛があるというのではなかった。子供たちはその死の前の晩も、寝る前に祖父に「お休みなさい」と挨拶した。起きると祖父はもう冷たくなっていた。祖父はとうとう秋田にも、東京にも帰らずに死んでしまった。

と書いている。

孫の目からは「子供のわたしにもわかっていたのは、祖父は失敗した人、仕事もなく、時を潰している人ということだけだった。夜の食卓には一・二本だが大抵酒が出て、祖父はそれがたまに二・三本になると気勢をあげることがあった」と見え、ここでも秋田出身の「祖父」は酒と無縁ではなかった。その飯島氏の祖父の言動に関し

軍国主義教育、国家主義的教育を受けていた小学校時代、中学校時代のいつだったか、わたしは江戸時代の国学者の名を口にしたことがあった。その時祖父は「平田篤胤」の名をあげたような記憶がある。「秋田は平田篤胤だ」と言った声が残っている。

という描写がある。アイデンテティーに連なるところで平田を誇ることのできた時代は、秋田にとって幸福であったのであろう。

68歳で世を去る八十八翁が平田篤胤をどう考えたかはわからないが、須磨弥吉郎その人はどこか平田的なところがあったのかもしれない。秋田中学（後輩の段階では秋田高等学校だが）の後輩である作家西木正明は『梟の朝』で、昭和32年（1957）突然母校にやって来た須磨代議士の、秋田高校で行った講演について、

膨大な時間の壁をへだてているのに、この時の情景は奇妙にはっきりと覚えている。須磨代議士は卵型の顔にやや斜視がかった大目玉という独特の風貌の持ち主で、分厚い体軀をグレーのダブルの背広につつんで壇上に上がった。

話の内容は、案の定現在の日本を動かしているのは自分だといわんばかりの、大風呂敷の連続であった。この時須磨は、「このたびの訪米で、わたしは同行した千葉三郎君らとともに、両国の間に山積する諸問題について、アイゼンハワー大統領ら米国の要路と真剣かつ友好的な会談を行ってまいりました」と大見得を切った。後でわかったことだが、この時同行者扱いした千葉は労働大臣という現職の閣僚で、訪米団長の任にあったのに対し、須磨はいわば随行議員団の一員にすぎなかった。

ただ語り口がきわめて陽性で、時折爆笑がわ

くような話だったので、げらげら笑っているうちに講演が終わってしまった。権威らしきものには何にでも反発したくなる年頃であったにもかかわらず、わたしはこのホラ吹き男爵的で豪放磊落な母校の先輩政治家に、なんとなく好感めいた感情を抱いたが、今にして思えば、あれも何かの因縁だったのかもしれない。

いずれにしても、講演というより講談か漫談に近い話だったので、その内容については前述のように断片的にしか覚えていない。その中で彼が奇妙にまじめな調子になって、さらりと言った次のような内容のせりふだけは、なぜか強く印象に残った。

「大東亜戦争の間、わたしはあらゆる手段を用いて、連合国側の情報を収集しました。その中には、アメリカの原爆開発の情報も含まれておったのです。今となってはせんもないことだが、わたしの情報をきちんと活用してくれていたら、広島、そして長崎のあの惨劇は、防ぐことが出来たのではないかと思う」

当時は米ソの核開発競争が熾烈をきわめていた時代である。

と書いているが、この主人公の人間的大きさは、作家西木氏が見るところであるだけではない。未千秋氏が息子としての目から「家は幸にして弥吉郎という傑物が出たから、四分五裂せずに済んだようなものであった。実際頭脳も体力も弥吉郎が須磨家のエッセンスを皆さらって行ったようなもの」と書いている。今諸資料から判断してもその通りであると思われる。家庭の問題は賢夫人によって大方処理される中、少しも撓まずに前進を続けるのである。

昭和12年（1937）正月中に命令により帰朝し、４月に大使館参事官に任ぜられ、比律賓出張などを経て６月米国に赴任した。間もない７月にいわゆる日華事変が勃発した。そして12月17日には南京入城ということになる。中国通の参事官は辛かったに違いない。14日には曽て須磨家が赴任居住した北平が北京と復称していた。またこの12月は、１日に後年大活躍するスペインについて、フランコ政権を政府が承認した月でもあった。

米国には夫人も同伴赴任した。大正12年からの独乙、昭和２年からの中国（北京、翌年北平と改称）、そして今回が、夫人の海外勤務と解されるが、事変の関係で任地では最も居心地の良くない日々を送ったことと思われる。留守宅は夫人の母堂はいたものの、一高生未千秋以下和章・土思子・吉弥枝という子供達だけの生活となった。米国における自動車事故もあった由ではあるが、家族を案じててあろうか年末に夫人は帰朝する。その夫人の新聞談話が『母』に「昭和十三年十二月十六日、朝日新聞秋田版」からとして引用されている。「蔣介石や張群にあれ程いって置いたのに……今一度要人に説いてみたい、膝つき合わせて話してみたい」というのが主人須磨氏の気持ちだとあるのをみると、彼の無念さがわかる。その中で同14年（1939）７月満州国在勤を命ぜられ、８月ワシントンを出発し、９月19日に東京に着いた。

10月18日外務省情報部長に任ぜられる。戦時下政府の中枢の要職である。11月13日勲三等瑞宝章を受ける。48歳であった。いよいよ『紀元は二千六百年』と謳われた昭和15年（1940）となる。１月16日阿部信行内閣から米内光政内閣に変ったが、６月29日の有田八郎外務大臣の声明原稿から日独伊関係強化を削ったとして、憲兵隊に任意出頭したこともある。７月22日近衛文麿第二次内閣に変わり、12月６日「特命全権公使西班牙国駐剳」を命ぜられる。西班牙はスペインの漢字表記である。翌年１月30日に着任した。ここでまた大きな彼の外交活動の山となる時期をフランコ政権下のイベリア半島において迎えることになる。

新聞雑誌などで、中学生だつた我々もこの頃から「須磨公使」の名を見るようになったが、故郷秋田でも期待されていて、昭和16年11月『土崎港町史』（４月１日に旧土崎港町は秋田市になった）は、第十四編第四章に出身人物という節を設け、その「官吏、軍人、経済産業方面その他文筆家」の項の冒頭に「須磨弥吉郎氏は、スペイン公使として任地にあり」と記し、ダブルの背広で大きな眼の写真が載っている。次の段は「海軍大佐、相馬信四郎氏、陸軍中佐、佐々木貞治氏云々」と続き、公使の他に佐々木氏の軍服姿の写真が載っている。この章に出ている写真は２人のほかには近江谷駒・金子洋文両者のものしか掲載されていな

い。この年『米国及米国人』を刊行している。

在スペインのこの時期の活躍は西木氏の書いている通りであろう。履歴書には特別記載もないが、戦時中の国際的緊張の中で、公表されないことも多かったに違いない。昭和20年（1945）54歳にして、『須磨弥吉郎外交秘録』に収められる「報国憂記」を書くのである。この秘録が世に問われたのは長男未千秋氏の孝心によるが、昭和63年10月付になっている氏の《あとがき》は父君に対する誠意に満ちている。そこには

「報国憂記」は読んでいただくとわかるが、親爺が任国スペインに断交され、軟禁の状況下で敗戦もま近い昭和20年６月、捲土重来を叫びながら、十日間で書き上げた草稿である。

と成立経過が述べられる。10日間で一気に書き上げた公使の実力には恐入るが、それだけに難読原稿であったらしく、《あとがき》には次のような記述内容もある。すなわち「俺の字を読めるのは存命中の人では四人しかいないが、その人達の助けを借りて自分が死んでから世に出して欲しい」という意志に基づき刊行したというのである。

誰の字でも読めるという或る古老にも見せたが、親爺の字には手を上げた。結局私が愚妻の助けも借り判読するより仕方がない。それがこんなにも遅れた弁解である。……

最近、須磨弥吉郎を研究したいと私に接触して来られる方が少なからずある。今の日米関係の或る部分は「報国憂記」の中の分析が役立ちそうな所もあると思う。本書が昭和史の研究者の資料の一端としてお役に立てば幸いである。

と記される努力と趣旨から出版された書物なのである。そして間違いなく価値ある昭和史の史料である。第六冊に「二十二、救国の大本」の章があり、その（２）所謂国家新体制に『神皇正統記』を引いているが、この書を常陸国小田城で延元４年（1339）に北畠親房が書くときには、極めて限られた参考資料しか手許には無かったと聞いている。本館話の主人公も多分同様であったに違いない。

彼は、南朝を想う親房に劣らず「国」を想う純烈の気持ちを《序》に託して

青年の頃政治に志して教育学を学び又文学を覗き、法律学を研めて外交に身を委ぬること二十有五年、事志に違ふこと久しく忸怩何ぞ人に見えんや。職を奉ずる所、英あり、独あり、支那あり、米あり、世界展望台たる西（スペイン）あり。想へばよくも敵国といふ敵国を彷徨せるものなり。謂はば禍乱の跡を廻りて今や断交の間に在り。勤務二十五星霜にして甫めて閑居の身となる。世界動乱を需めてその禍（渦であろう）中に眺め、敵国に在勤せる経歴と併せて多少の印象なき能はず、且つ今や皇国の立つ岐路たるや尋常ならざるものあるを深く思念しつつ小感実想を茲に録して報国小憂の記となし他日の資となさむ。　（昭和二十年六月四日、記）

と心中を吐露している。文中仮名遣いに混乱が一、二あったので、理によって歴史仮名遣いに統一して置いた。

どの章を読んでも、広い視野、鋭い視線、的確な視点に感じ入る。序で「渦中に眺めた」とやや控え目に表現された真相は「凝視した」であったことがわかる。視たこと聴いたことを深く心中に納めて考え、秘めては置かずに強烈に記述したのである。それを本にしたのは長男未千秋氏達の孝心である。古代史を専攻して来た者として平安朝以来の《家学》の伝統を理解している心算であるが、近世でも古義学の伊藤仁斎と東涯、国学の本居宣長と春庭・太平、平田篤胤と鉄胤など父子の学の成果は高い。外交官須磨父子の家学が本書を完成したのである。序を書いて70余日国は敗れた。終戦後４カ月にして12月６日にＡ級戦犯に指定された。彼は「マドリッドで近衛、木戸、大達など９名の二番目に掲げられ」たと『とき』に記している。憂憤やる方なかったに違いない。

やがて翌年スペインから引揚げることになり、プルスウルトラ号に乗り３月26日久里浜港に帰着した。彼は最後に船から降りジャーナリズムに囲まれたという。４月１日勅任官となり、19日依願退官した。これからは

昭和二十六年八月六日、戦犯指定解除になるまでの五年間、夏の季節より秋十月まで蓼科の山荘に篭もって、天気が良ければショートパンツで、上半身裸で散歩し、山荘の屋根の上に仕つら（設）えた展望台で、太陽を浴びながら絵筆をふるい、また、おびただしい枚数の原稿を

書き上げた。（『母』）

と記されている通り、主として美術論芸術論の著述をし専門雑誌に発表されている。また『母』によれば、山荘には留守番の婆さんがおり、夫人も東京からお手伝さんを伴って身の回りの世話に赴いていたというから、この積極性ある50代半ばの退職外交官は誇りを損うことなく、戦犯問題を除けば、心にわだかりもない、心身共に自主自由の生活をしていたものと私考する。

個性的で大胆なタッチの＜自選十四作＞以下の絵と共に、力強く卒直な文章の、さきに「時」の意と認められるとした『とき』などを読み、この後に刊行される諸書を見れば、精力的な執筆活動もこの自由の時間があったから可能だったのかもしれない。未千秋氏は

戦犯に指定されながら、幸いにして巣鴨に収監されずにすんだ安堵感はあったものの、言ってみればやはり失意の時代であり、雌伏の時代であった。（『母』）

と結論づけられた。「雌伏の時」は正に適評であるが、その際《ふるさと・故郷》の役を果たしたのが「秋田」ではなく「信州」であったこの事実は、きっと主人公を暗くし、もやもやに追込んで滅入ることに導かずに済んだ所以であると判断するものである。血の故郷は秋田に違いないが、生活の故郷は家族と共に信州であったと認められる。勿論須磨は故郷を心の中にしっかり持っていた。『とき』の中に「齊白石を知る」という或る意味では自作篆刻自讃でもある項目がある。対応する頁には「大山曉雪」という、「赤富士」とはちょっと趣が異るけれども朱の鮮かな伯耆大山と覚しき山容が描かれている。そこでは

血は水よりも濃くて、祖父の古仲清廉翁はいわば東北での豪族であるばかりでなく、男鹿半島に跼蹐はしていたが、詩文はよく勉強していた。それなればこそ、ぼくがまだ秋田中学にはいらない小学校４年生ごろの11歳時分に、篆刻を臘石にやることを手をとって教え、ぼくほどの不器用ものはないと今も思ってるのに、篆刻だけは、「弥吉郎、お前は天才だから判コ屋にならぬか」と本気でいったりしたのであった。今でも男鹿半島の北浦町を中心として、古仲という姓のものは、みなこのぼくの母の出た古仲家を宗家としている。

その清廉翁のいうほかのことは一向にきかなかったが、篆刻はおもしろくて11歳のころから始めた臘石での篆刻がもう178件にも上っている。

と記している。豪族で一族の宗家たる古仲家が、父系の須磨家とは異る士族伝統性を備えた、血と魂との故郷だったのである。祖父を翁と尊称するのは東洋の伝統であった。尊属の謙称は新しい。

60歳奇跡的にＡ級戦犯は指定解除になる。昭和26年８月６日である。翌年刊行の『日本民族の進路』（妙義出版社）は、この年５月憲法記念日の夜にＮＨＫで放送した講演『世界の現状と日本の進路』が基になっていると序文にあって、憂国の志と青年への期待の熱さが読んでいると伝わって来る。この熱血の著者の「やっぱり日本に徹するのだ」という呼びかけの叫びが、政治を論じた広島高師時代と変ることない若さを示している。

雌伏時代の『夢』（宝雲社）・『スペイン芸術精神史』（みすず書房）・『世界動乱の三十年』（同）などと比べれば、政界を志向する姿勢が予感を越えて知得される。そして翌昭和28年（1953）４月19日衆議院議員に当選した。一区は石山権作・石田博英・細野三千雄・須磨弥吉郎、二区は川俣清音・根本龍太郎・飯塚定輔・斎藤憲三が当選者であった。この年４月に秋田に転任して来たので印象深く記憶している。この年３月20日には『スターリンの碑銘』（日経新聞社）を出版するが、筆勢は極めて旺んである。この役人から政治家になったところで思い当たることがある。

『母』に「弥吉郎批判の母の書簡」という一節があり、著者の「どうしても記録に残しておきたい、母の父に対する激しい非難とその反省を求める書簡が残っている。日付もなければ、ただハトロン紙の封筒の中にさりげなく入れたままで父の机の抽出しの中に残っていた。父の没後私が父の書斎の机を引き継いだので、父がある時それを母から受け取ったまま、放りぱなしになっていたのかも知れない。私はその手紙の背景についてはハッキリ覚えていない」として書中におさめている書翰である。

人間と云ふものは口や筆で征服したのでは長持ちしません。

信じるとか信じないとか云ふ事は、それは事実の問題です。それはあなたは幾多の優れた点が御座いませう。然しそれを以て人を心服し得ると思召したら、それは大間違ひでせう。人格の上から来た心服でなければ、永久的のものでは御座いませんし、人を又ほんとに征服する事は出来ません。唯々信ぜよと云ふ事は比較的理性に勝って居る私にむずかしい事かもしれません。私はいつもあなたに苦言を呈しますが、この苦言の中に居る間はあなたは永久に無事でせう。

理性に勝って居る様に見えて、決してあなたは理性の人ではありません。むしろ感情の人でせう。常に何物かと闘って居ると云ひますが、何と闘って居らっしゃいますの。

あなたは一体何の爲めに生きていらっしゃいますの。私は一面あなたに敬服して居るかもしれませんが、一面に於ては唾棄すべき幾多の点を常に見て居ります。私のあやつりがなければ、あなたは近き将来に於て、永久にほほむられてしまふものと私は信じて居ります位、それ位、あなたは傲慢な諸点があります。‥‥もっともっとあなたは努力がいります。反省がいります。もしほんとにあなたの云ふ大きな人間となって世の中に立とうとするのには、余りに暴君の如き振舞では人の心を決して服させるものではありません。

あなたが外務省の一役人として満足して終るといふなら、それは又別問題ですが、‥‥

というきびしいそして最高に暖かい文章である。一読して代議士になった夫君を夫人はどう受止めたのであろうかと思ったのである。

昭和30年（1955）２月27日の総選挙でも須磨議員は当選し、『中共見聞録』（産経新聞社）という時局的な著作をする。翌年『外交秘録』（商工財務研究会）と、『中共心影録』（僑光印務有限公司）という中国通らしい著述を行う。同33年（1958）８月母校中央大学常任理事の任に就き、11月メキシコ大統領就任式典に、一万田尚登特派大使顧問として随行する。新大陸発見時以来ノビスパンとしてメキシコがイスパニア（スペイン）と関係深いことと関連しての任務であったものと私考する。

先に触れた『とき（須磨日記）』という豪華本が刊行されたのは昭和39年（1964）のことで、翌40年74歳にして勲二等旭日重光章を受ける。それから５年、昭和45年（1970）４月30日、秋田の土崎出身のこの英傑外交官は、東京で79歳の生涯を閉じた。満では77歳であった。思えばあたかも彼の「七〇年安保」の時期に当たる。自ら風雲を呼んだこともある外交官には感懐深い時期であったかもしれない。はな夫人は97歳の長寿であったと『母』にある。当然満年齢での表記であろう。

後記

須磨未千秋氏は、平成10年秋に父君の蔵書を角館町の図書館に寄せられるに際し、秋田県立博物館に父君遺愛の小箪笥・袴（夏・冬）・茶碗・湯飲・絵具などの他、父君筆の掛軸・水彩画帖・色紙綴などを寄贈された。

白瀬　矗

文久元年（1861）６月13日主人公は出羽国由利郡金浦村浄土真宗浄蓮寺に生まれた。13世住持白瀬知道・マキエ夫妻の長男である。幼名は一千代であったというが、三歳下の弟も知行というので、永く一千代のことは知られておらず知教が幼名とされて来た。一千代説は歿後に発見された自伝稿にあることで、何歳で知教に変ったかなどの記録はないらしい。また彼が明治43年１月に帝国議会に提出した経費下付請願書には「元治元年」生れと記されており、大正２年（1913）の『南極探検』（博文館）にもそうなっている由であるが、現在も金浦町役場に保存される戸籍では文久元年となっているので、これが正しいものであろう。３歳若くなることになる元治元年は何らかの判断があっての主張と考えられる。

明治２年（1869）数え年９歳で浄蓮寺に教室のあった近所の医師佐々木節斎の寺子屋に入った。節斎は平田篤胤の高弟で蘭学通だったと伝えられているが、平田門にも入った佐藤信淵が宇田川玄随門下であったというような履修歴なのかもしれない。師匠が節斎であった件は、知教少年の探検

家志望の原点であるとしてよく知られて来たが、その自伝稿では、寺子屋の教師は斎藤柴右衛門と佐々木節斎の両者で、家庭では厳父から漢字と宗教の教育を施されたとの記載になっているという。寺院の長男としては当然の学習であったと考えられる。かくて明治五年に11歳で、探検家の話を聞き、腕白少年だった彼が探検を志すことになり、先生に「五断ち」の教えを受けたという。すなわちそれは、酒・煙草・茶・湯を飲まないことと、暖房の火に当たらないことであったという。子供には必要のないような条件もあるから、要するに極地やそれに近い寒地で暮らせる忍耐や禁欲について教えたということであろう。そして彼はこの五つの禁止事項を守り通したということである。

その後秋田の西法寺小教校に学び、15歳で山形県の寺院で小教校に通うことになる。寺の長男としての修学コースである。山形の寺院は東置賜郡宮内町正徳寺で、母の生家でもある。現在は南陽市であるが、古くから有名な熊野神社に地名も由来する宮内の新町にある真宗大谷派の寺院である。

白瀬自身が『南極探検』の中に書いたものを、渡部誠一郎氏が『よみがえる白瀬中尉』（秋田魁新報社・昭和57年）に引用補充した文章があり、そこで「六歳の時、天然痘に罹って死に損ね、墓場の餅を摑み食いして阿母に手を縛られ、十歳の時、キツネ狩りをして左の肩に嚙みつかれ、十二歳の時、オオカミ退治をして大怪我をし、十三歳の秋、観音堂の屋根のてっぺんから墜落して気絶し、翌年（金浦の港で）千石船の（下を泳いで潜り抜けようとして）舟底に吸い込まれ（危うく命を失うところだった）、十五歳の時、百五十人と血闘した天罰で赤痢に罹り、熟し柿を腹一杯喰って全快し、十六歳の時（注・実際は十八歳？）、東京へ飛び出して小教校に入学し、同僚と喧嘩して叱られ、教頭に反抗して禁足され、学校を遁げ出して近衛連隊に採用を乞って刎ねつけられ」と述べられるようなこの人の、150人相手の事件とは、宮内時代に同級生の１人で町内有力者の息子と雪玉の固さ比べに負けて相手の雪玉を踏みつぶしたことから乱闘になったのだという。初め成績も悪く15歳で９歳の子よりも下位で笑いものにされたので発憤、皆が寝たあとに毎夜３時間猛勉し、３カ月で３級飛び越し優等生になったと自分で書いている。当然それだけの能力は生来あったのであろう。

明治12年（1879）７月19歳で上京浅草本願寺の教校に学び、『私の南極探検記』（皇国青年教育協会・昭和17）に「（私の）服装は粗野で、言語といい、態度といい、東北丸出しであるところから、同級の生徒達は寄ると、さわると私の噂ばかりする。ズーズー弁だとか、東北の田舎っぺだとか、甚しいのになると〝東北の猿〟と言った。私の顔は猿に似ている。これは認める。けれども、私は剛直の気質で、あくまで人に負けるのが嫌いな男である。同じ学校に居れば、同じ権利がある。なぜ同級生に屈していねばならぬ理由があろうか。噂をよそに、私は大きな顔をして威張っていた。」とあることを『よみがえる白瀬中尉』が紹介し、続けて、ある日副級長が白瀬にちょっと顔を貸せということで、五人組と乱闘になり、相手は血まみれになり、教頭が駆けつけたが、一方的に五人組に肩を持ち、彼を禁足一週間の処分にしたので反発し、学校をやめ軍人志願になったことを記す。

白瀬は剛直負け嫌いで素質もあり努力もしたから、やがて目的を達成するのであるが、概して東北出身者が浮かばれない思いをする場面はそう珍しいことではない。曽て『古代東北史の人々』（吉川弘文館・昭和53）という、本を書いたことがある。古代の東北の立場を格別激言でもなく平静に書いたものであったが、読んだ人の中には自分の考えと違うところがあったらしく「反逆者蝦夷の子孫!!お前はエセ学者、田舎者!!」という若い文字の非難が届いたりした。封筒の消印は関西のスタンプであった。しかし関東地方在住の東北出身者で「これまで周囲の見方もそうで、自信を失っていたが、東北に自信が持て、東北人の誇を感じた」という読者の便もあった。それから10年後ぐらいにも「東北は熊襲の産地で文化も低く人も多くは住んでいない」旨の発言をした大阪財界の大実業家がいたぐらいであるから、田舎者はそれだけで都会人に対して「悪」だという論理はあったのであろうし、それが明治戊辰ノ役から10余年しか経っていない時期にはもっと露骨だったのであろう。

発憤した白瀬は赤坂の叔父宅に居を置いて、近衛騎兵聯隊を志願して果たさず、陸軍士官学校を希望して断られ、三度目の正直よろしくやっと日比谷にあった「陸軍教導団」（400人中5番の好成績だったという）に入団できた。学校の軍事教練でも、新しい整列隊型を作る際に、「教導一歩前へッ」という号令は昭和20年の敗戦まで活きていたが、この組織は陸軍下士官養成機関であった。軍人になるに当たって知教は矗と改名した。知教（ちきょう）は仏教に関わる名であろうが、矗（のぶ）は直（ちょく）が三つだが音は（ちく）で草木の盛んなさまや、高くそびえ立つさまなどの意であるが、長大に伸びているさまも示すので、文字通りの「大剛直」を意図した改名であろう。

明治14年（1881）3月、教導団を卒えると、4月19日付で仙台鎮台輜重兵科第二小隊に輜重兵伍長として赴任することになる。数え年21歳であるが満20歳には2カ月ほど足らなかったことを渡部氏は記述している。今風に言えば19歳の伍長である。同20年7月仙台の海産物問屋の娘である菅原やすと結婚する。父は長兵衛、母はたまの長女で明治5年生まれ数え年16歳の若妻である。翌年4月15日に長男知（とも）が誕生する。海軍兵学校（第38期）を卒業長じて海軍大尉のパイロットになる人物である。3年後の同24年（1891）3月6日には長女ふみこも誕生し、31歳で1男1女の父となったが、夫妻はなお内縁関係であった。

その理由は、「陸軍武官結婚条例」というものの不合理に反発したからであるという。渡部氏は『日本軍事史説話』なる史料を引用して大変わかり易く「結婚条例は軍人家庭の万一の経済破たんに備えて大尉が結婚する場合には四百六十円、中・少尉は（それより高い）六百円、准士官八十円、下士六十円を陸軍省に納付しなければならない。危急の場合は還付（無利息）する……というものだった。だが、当時軍人給与は低く、大尉の年俸が三百円、中尉二百二十八円、少尉の月給は十五円で、俗に〝貧乏少尉にやりくり中尉、どうやら暮らせるやっとこ大尉〟といわれたほどだった」と説明している。第二次大戦末期に見習士官から予備役の少尉に任官した際の記憶では月給五十五円ほどだったようであるが、終戦時焼いたものであろう確かな文字資料は持っていない。

何れにしろ彼は内縁関係のままで2人の子を持った。そして明治24年4月の「兵事新報」第23号に、「第二師団一兵卒」という匿名で陸軍武官結婚条例の廃止論を投稿したのである。青年将校たちはこれを歓迎し、反響は全国的に広がり、第二師団も責任上投稿者探しをすることになり、捜査が厳しくなったために、周囲のことを慮ったのか白瀬は自首することになる。師団一の勤勉な特務曹長が、いわば犯人だったということで、罰を与えるか不問にするかの論があった。結局は明治25年（1892）10月1日付で予備役に編入されることになる。ところがこの際に、「善行証」と「士官適任証」を与えたという。軍隊を愛する真情から出た意見開陳であることは、上層部も理解していたわけであろう。陳情文との表現も見えるが実質は批判し要請した文である。

明治26年（1893）6月、郡司成忠海軍大尉の「千島探検隊」に加わり、北千島最北端の占守島に上陸し、越冬の準備に入ることになる。その理由は明治23年秋に当時の児玉源太郎陸軍少将と知り合い、その知遇を得たことにあると伝えられている。すなわち第二師団の機動演習が宮城県で行われ、露営のテント内で行軍日記を書いている白瀬と、一夜、視察巡察した児玉将軍が会話する場面があり、北極探検の目的を持つ白瀬に、将軍は千島で鍛えることを助言、将来の支援を約束してくれたと『私の南極探検記』にある。後年の著述なので、詳細は理解困難であるものの、彼自身はこのことに深いこだわりを持っていたのであろう。しかしこの北千島行は難事であった。

その難事に敢えて児玉将軍のことを引合いに出してまで自身の目的を顕示して挑んだのには、心ならずも予備役に退かなければならなかった予想外の状況が、いわば背水の事情として出来したからであろうと思われる。綱淵謙錠『極－白瀬中尉南極探検記－』（新潮社・昭和58）には、中尉の『南極探検』も引用して、

> たかが新聞への投書に過ぎない問題が、投書者の捜査が白熱化して来ると、重大殺人犯か謀反人の捜査を思わせるような、深刻なものになってきた。ついには下副官以下の外出を禁止し、

上官が来てひとりひとりの個人調査が開始され、綿密な質問攻めを行なって－中略－しかし肝腎かなめの投書者は白瀬一人なのであるから、いくら他の軍人を探しても見つかるはずがなく、調査は難航して幾日にもわたった。

そこで白瀬は自首して出たのである。そこの心理の経過を白瀬は『南極探検』で次のように述べている。

〈所が熟々思ふのに、恁うやって自分一人の為に一般の下士官に迄禍を及ぼすといふ事は申し訳がない道理、且つ今に臻って秘するといふのは卑怯千万である。投書するからには言論の責は此方にある。且つ又自分は国家を憂ふる余り赤誠を吐露し、以て彼の陳情書を書いたのである。男子の行動として何の疚しい所があらう、宜しい、自首して遣らう。と深い決心をして検査官に向って、

「二師団一兵卒といふのは私である」

と自首して出た。纔かこの一言で、さしもの大事件（？）も首尾克結了した。上官は意外に惟った。団中評論の標的となった〉

「捕えてみればわが子なり」ではないが、投書の張本人が師団でも最も精勤をもって知られる特務曹長であり、下副官であった事実は、それまでの騒ぎにもました衝撃を師団内部に与えた。

と述べ、現役を離れたのを機会に、白瀬は長年《素志》として温めて来た北極探検のために、北千島探検に専念することになると、積極的転機に位置づけているが、一方渡部氏の位置づけでは「不本意な予備役編入」という項目題名になり、「全く不本意なアクシデトだったに違いない」と捕え、「この人の“運のなさ”を思わざるを得ない」と述べられる。やはり私見でも白瀬ほどの勇者であってもお先真っ暗なことだったと考える。現役を去った翌26年（1893）33歳の彼は函館にいた。それは教導団時代の友人で函館で小学校の先生をしていた大松川省三という人の家に滞在していたのである。それも仙台から発した救援嘆願に対し郷里金浦の人々が応じてくれたからできたことであった。

郷党が熱心に請いに応じたのは、当時の日本が挙げてロシアの南下に警戒心を超えて対抗意識を持っていた時代思潮と深く関係していた。当然識者の北千島重視の動きがあり、後世まで世に広く知られている郡司成忠海軍大尉の千島開拓警備策も展開されようとしていた。26年１月６日付予備役になった白瀬の資金状態と、郡司への政界や財界の格式ある支援とでは比較できない差があり、東京に進出した朝日新聞は郡司の計画を独占記事とすることにした。２月24日宮内大臣から『報效義会』の名を授けられ、天皇皇后両陛下から内帑金1500円を下賜されるなどの栄光の中で船出をする郡司大尉の報道は白瀬に深刻な判断をもたらした。すなわち、いかにせん今においてわが計画を断行せんか大尉と競争することになるから、それよりは「郡司大尉の旗下に馳せ参ぜん」という決意である。

郡司大尉と白瀬中尉なら、海陸の差はあっても１階級しか違わないように一見思えるが、実は彼はまだ特務曹長の准士官に過ぎないのである。それに大尉は江戸城の殿中で大名たちなどに対応する表坊主で利三と称した幸田成延の次男金次郎で、万延元年に生まれた白瀬より１歳年長にすぎないながら、幼くして父と同業だった郡司家の養子になりながらも、兄の幸田貞太郎（成常）、弟の成行（露伴）・成友、妹の延・幸（安藤）などと一緒に育ち、13歳で明治５年（1872）９月海軍兵学寮（４年後兵学校と改称）に入学したのち名を成忠と改め、同21年（1888）11月海軍大学校第一期生となったエリート軍人なのである。「旗下に」と思ったのも理解できる。白瀬は上京し、初め陸軍出身を気にしていた郡司を納得させ、報效義会に入会を許された。千島に漁場を持つ平出喜三郎の錦旗丸（1000屯）で白瀬が函館を出発したのは26年６月12日午前４時であった。

だが実は郡司大尉の千島行は決して順調なものではなかった。イギリス製の小軍艦震天号を借用する予定が却下され、横須賀鎮守府から払下げられた短艇５隻で北千島まで航海するということになった。80人ほどの報效義会員が分乗した５艇は予定通りには進めなかった。４月半ば函館に着くはずなのに、４月29日に入港できたのは塩釜であり、５月22日暴風雨のために青森県白糠港（東通村）沖で、三番艇と乗組員10名が遭難したし、27

日に鮫村の大久喜海岸で鼎浦丸という帆船が難破し乗組員９名が遭難した。また大尉乗組の帆船報效丸も22日の暴風雨で出戸浜（六ヶ所村）に乗り上げていた。鼎浦丸は気仙沼で篤志家に贈られた船で、報效丸は福島県の原釜で購入した船であった。残った４隻の艇が白瀬の待つ函館に着いたのは、６月５日の午後６時であった。しかもそれは磐城という軍艦に曳航されての入港であった。３月20日に東京隅田川の向島から大壮行会をもって送り出された時の勇姿は全くなかった。のみならず５月28日の夜に大久喜海岸で鼎浦丸遭難者通夜の際に郡司が負傷するという事件が起った。当時自殺または変死とまで報じられたというこの事件を綱淵『極』は「大尉の〈自殺未遂〉事件ではなかったかと推理している」と書いている。

磐城艦航海日誌という昭和54年刊行の本には、名艦長柏原長繁少佐の報告が記録され、そこには６月４日午後６時43分端船３隻を引いて鮫港抜錨５日午前４時13分出戸にあった報效丸を引卸し曳航しようとしたが荒天で郡司と協議して諦め、５時20分白糠で漂泊して第二艇を呼び、８時計４隻曳航して北航、午後６時に「一の故障もなく無事にして函館に投錨す。但、便乗人等は直に退艦せしむ」という状況で、報效会員が厄介払いのごとく直ぐ降されたことが述べられる。郡司はまたこの艦に曳航と便乗を頼み、自分は出戸に戻って12人の艇員で報效丸で根室に向うことを考え、海軍大臣に許可を求めたが、北海の荒天を理由に艦長は曳航を断わり、便乗をも断った。地元紙は報效会の隊員が船室を汚損し水兵の邪魔をしたからだと噂したという。難航したり水難に遭ったりしたのだから無理もないが、会員たちは整然とした軍人経験者らしい統制性を失っていたらしい。

白瀬はこの際「自分はやがて予定の如く大尉と函館に於て手を握った」と大正２年の『南極探検』にはさらりと書いたが、郡司没後十数年の広瀬彦太『郡司大尉』（鱒書房・昭和14）になると、白瀬は「千島拓殖の先駆者郡司大尉」という追憶文で、６月10日午後３時から函館の高竜寺で沈没死隊員19名の慰霊祭が行われた時のことについて「余等数名仙台より別働隊として先行し既に函館に着宿してゐた爲め、之に列席するを得た。斯くて余等は、郡司大尉の一行と合し、千島へ渡島せんものと協議一決したが、報效義会も余等も共に渡島に要する経費は殆ど皆無であった」とあるので、８日午後７時44分磐城が出航してしまった後の白瀬は、郡司の旗下に入っても北方探検については実利がなかったもののごとくである。白瀬が「余等」といっているのは、彼と吉田良一・佐々木一造・倉本進・佐藤清の５名で大松川氏に仮寓し、待望していた郡司大尉への期待は少なからず裏切られたことになろう。それのみか、木村・谷口共著『白瀬中尉探検記』という昭和17年の書物になると、綱淵は、この本の著者が「晩年の白瀬から直接聴取した記事と思われる」と把握して、『極』の叙述に組み込んでいるが、すなわち慰霊祭の席上で、艇員の中には反抗の気配が生じ、帰京の旅費を請求する者もあった。答弁に窮した郡司は沈黙し、解散して千島行きを止めることになりかけたというのである。だがそうはならなかった。白瀬が「鎮まれ」と一喝し、陸軍出身で、特別に入会を許されたばかりであり、発言は差し出かましいが、困り切っている上官に衆をたのんでの不穏は、武士の情を忘れたのかと戒めた。最年長の浅原兵曹長が非礼を詫び、更に白瀬の郡司への励ましがあって、大尉も翻意して千島行を決意したということになったというのである。

結局、白瀬と郡司がいたことで、６月12日の錦旗丸同乗千島行きは実現したわけである。時が経ってプライバシーに直接関わることの少なくなった時期の話が真相に近いのであろう。こうして千島に向った一行は会長・会員38、準会員（白瀬等）５、医員１、宗教家２、記者１の48名でまず択捉島に６月16日正午到着し、住居の建築などをした。後続17人も７月３日に着き、同20日泰洋丸という帆船がこの島に着き、硫黄採掘に捨子古丹島に行くのに18名が同乗して、31日午後２時半にこの島に上陸した。更に８月30日あの磐城がまたやって来たので９名が捨子古丹島から占守島に運んでもらった。艦上には和田というハリスト教徒と山中会員が乗っており、和田は幌莚島に単独上陸した。31日午後に一行は占守島に到着する。９月23日根室に帰る磐城に山中と島野医師及び朝日の横川記者が乗って帰って行き、郡司・白瀬以下計７名が

千島北端で越冬することになる。記者横川勇次は盛岡の人で、勇治といい、のち省三と改名する。明治37年４月に沖禎介とともにハルビンでロシア兵に銃殺されるあの横川省三である。

越冬生活は悲惨であった。渡部『白瀬中尉』も「悲惨に終わった越冬」という項題になっているし、綱淵『極』も「北航」「遭難」「北涯」「越冬」「穴居」「筆誅」と章題が展開して行くのである。筆誅を加えるのは『二六新報』の明治37年（1904）１月初旬から２月下旬に亘る47回の連載記事であり、「北海の惨雲・郡司大尉の罪悪」という余告記事が残すところなく語るような郡司攻撃で、白瀬非難などではない。むしろ白瀬は同情さえ受ける受難の越冬をした側である。占守島で郡司・白瀬以下は地勢・気象・物産の調査、外国密猟船監視などを秋まではできたが、氷点下10度から上にはならない冬の暴風雪下の穴居生活は、27年４月になって再び外の調査も可能になるまで続いた。28日に郡司・白瀬他１名の島内南部探検行は大尉が右膝と眼を痛める難事であり、頑健な白瀬だけが作業も可能であるという程度で済んだ。この体力こそ彼が南極探検に成功した根底にある要因である。だが５月10日流氷も去り水路が通じたので４人で訪ねた幌莚島では、和田越冬者が３月下旬か４月上旬孤独の死を遂げていた。悲劇はそれのみではなかった。軍艦磐城が６月26日に上陸して調べたところ、捨子古丹島でも５人は行方不明、４人は穴居小屋で死んでいて、生き残ったのは犬１頭だけであった。艦の軍医長によって水腫病と一酸化炭素中毒であろうと判定された。和田も水腫病であった。

ここまでであれば、他人がどう考えようと白瀬は郡司の側に立つ理解者であり続け得たであろうが、白瀬の卓越した能力と、皮肉めくがそれを郡司が評価したことによると思われる、厳しい結果が導かれることになってしまうのである。捨子古丹島を27日午前10時に抜錨して北に航行した磐城は、28日午後３時半に占守島片岡湾に着いたと白瀬の『千島探検録』（東京図書出版・明治30）は記すが、この時郡司らは釣りに出かけて白瀬ら３人が基地にいた。３人は早速乗艦して情況を報せたが、遅れて郡司らが着き捨子古丹島の全滅を知ることになる。ところが磐城には郡司の父幸田成延が乗っていて、日清の間が風雲急を告げていることから、軍籍にある越冬者達は引揚げて戦役に当たるべく、交替の越冬要員は若者５名を連れて来たという趣旨を論じ立てたのである。五十代半ばも越えていたと考えられる老父の越冬を避けしかも父の論と妥協するために、郡司は白瀬に若者５人と残留するように求めた。軍人白瀬は応召の事を考えて渋ったが、郡司は命令の形で残留を要請したという。もとより白瀬は拒否するべくもなく、未経験な若者達と共に２冬目の穴ごもりをする。郡司は途中青森で尋常小学校２年の長男を伴った白瀬夫人と会い説明し、帰京後佐世保鎮守府海兵団附で大連湾水雷敷設隊分隊長となった。一方白瀬には数度の召集令状が発せられたものの留守宅では受取った令状を都度根室庁に届けるのが精一杯で、根室庁も占守島に届けるべくもなかった。

第２年目の越冬は、27年７月２日から神戸商業卒業の杜川・三重県尋常中学卒業の葛原・水戸尋常中学生徒の山本・千葉県農家出身の関・同じく御園生という５人の青年との生活になるが、鳥獣や魚介の調査などを進め、カムチャッカ渡航計画まで発表する白瀬も、天候の悪化もあって若者たちの慎重論に妥協して中止したりする中で、次第に「矗孤り沈吟しつゝ焚火の将に尽んとするを恐れ」と書く行間、孤独感と、共に行動する若者への期待喪失の挫折感を滲み出させる。単に「今の若い者は」的な世代差感には止まらない。８月27日には近くにある旧土人（元の土地住人）の竪穴に改造を施して独り別居した。お互にその方が好都合だったのであろう。しかも「去る者は日々に疎し」的だったのか両者間に不信感が生じたらしく11月３日の『天長節祝詞』では「国旗に無礼なる無頼の徒、祖宗の神霊に不敬なる烏合の輩」と言い切り、「報效義会員なる烏合無頼の乱臣賊子」と明言するようになる。この部分を叙述して綱淵『極』は「占守島残留中の五人の報效義会員」への罵倒は「郡司大尉や幸田成延らに」対する罵倒でもあり、祝詞による「奏訴」であると位置づけ、「本格的な冬の訪れないたった四ヵ月で、報效義会にたいして絶縁状をたたきつけていた」とした。自分を戦役に参加させないようにした大尉の「強

迫的残留を励行」する因をもたらしたのは「郡司成忠の厳父」の「牝鶏のあしたにするは家の亡ぶるなり」というような理に叶わない「局外者」の主唱に発しているとする白瀬の怒りは、明治28年７月１日カナダの遭難密猟船のロック船長から情報を得、「彼れ碧賊より日清役のありし事を聞けり」ということになって、「憤懣、断腸、切歯、扼腕無念の至り」と軍人の名誉を損ったことを悔む。こうなれば、後悔の念は如何ともなし難かったことであろう。

彼が未熟さを感じた５人は、やはり無事ではなかった。３月５日杜川が水腫病となり４月19日死去（24歳）、その頃４月７日白瀬・９日山本・11日御園生も水腫病になった。５月７日御園生死去（28歳）、13日山本死去（21歳）、白瀬も一時病情激甚だったが６月１日恢復した。この間において、葛原も僚友の死に神経症になり、関も風邪病臥し食物が尽きたため５月15日飼犬を射殺してやっと栄養を保った。「法名　釈報忠　俗名熊犬」という塔婆を建てたというから切ない念いであったに違いない。５月24日関と２人でやっと３人を埋葬し、１日後にカナダ船が難破し救助を求めて来ることになる。そしてカナダ船の僚船２隻が７月５日にやって来て、日本人と英人各１人を白瀬側に残し若干の物品を置いて、８日に膃肭臍の生皮900枚などを積んで出航した。しかし８月になっても日本船は来ず、英人は８月４日幌莚島に入って来たカナダ船に便乗して去った。函館の八雲丸（42屯）という猟虎猟の帆船が派遣されて占守島にやって来たのは８月21日午後であった。生存隊員３名と救難者計４名が八雲丸で択捉島に向け出港したのは27日であった。白瀬が仙台に戻ったのは10月19日になっていた。

苦闘し辛酸をなめた足かけ３年の占守暮らしは白瀬に多くの打撃を与えた。戦陣に立てなかったのはその尤なるもので、金浦でも一時「白瀬の残留越冬は召集を忌避するためではないか」という噂が流れて親類一同困惑した旨の記述が渡部『白瀬中尉』にあるのを読むと、思い半ばに過ぎるものがある。だが北極探検の小手調的発想で郡司のもとに馳せ参じたわけであるから、これだけの実地体験をし、しかも水腫病さえも克服した自信というものは何物にも替え難い収穫に違いない。だからこそ、明治29年また千島に渡り、米国の密猟船に便乗しベーリング海峡を越え、ポイントバロー岬に上陸しエスキモー村落で越冬したというような、追加経験に挑むこともできたのであろう。この年末母マキエが62歳で死去する。彼は36歳であった。

明治30年（1897）後備役の教育召集であろう第二師団輜重第二大隊に入隊し、後備輜重兵少尉に任官する。４月に『千島探検録』を刊行郡司大尉と報效義会を強く批判するのである。10月二女タケコが誕生した。家庭生活も復活したわけである。明治32年10月「宮城県属」となった。県庁の役人の職を得たのである。報效義会批判からの請願書「千島義勇警備田漁兵設置ノ件」を明治33年１月22日第十四回帝国議会に提出した。義会のようなものではなく北海道の屯田兵のような、千島駐屯隊設立を建白したものである。７月に三男猛が誕生。明治34年（1901）翌年８月の衆議院議員選挙に出馬しようとして本荘の須藤善一郎代議士に申入れをしたりするが立候補は実現はせず、第十五回帝国議会に「千島庁ノ設置」「千島総督ノ任命」を請願したが、これも義勇警備兵の場合同様に成功はしなかった。

明治35年（1902）10月に北海道庁に勤め札幌に移住した。教育課に属し42歳で市町村立小学校教育恩給審査書記などの任に当たった。「深林中の死美人」という話が生まれるのは、36年９月に札幌から岩内迄１夜で教員検定試験問題伝達の離れ業を行った時である。12月には三女チヨコが生まれる。宮城県庁にいた彼が北海道庁に移ったのは、上司の平岡書記官が転任し、それに従って家族と共に渡道したのであるという。

明治37年（1904）44歳にして、６月応召弘前の第八師団衛生予備廠長として、日露戦争の戦場遼東半島に赴任した。38年１月の黒溝台会戦で右手と胸に負傷した。11月中尉に昇任し勲七等の叙勲を受けた。遂に広くその称の知られている「白瀬中尉」が誕生した。39年１月末帰還広島上陸、輸送指揮官として弘前に凱旋する。４月１日従七位勲六等単光旭日章を受けた。５月26日付北海道庁を辞し東京市長尾崎行雄に招かれたということで

東京市役所に勤める。ところがこの年７月23日に子爵児玉源太郎大将が急死した。その真相はどうであったにしろ、彼が最高の理解者として知遇を得たと称している大人物である。前日台湾総督府民政長官後藤新平が児玉邸を訪ね南満州鉄道株式会社に関する要談をしたばかりであった。綱淵が『極』で「聖将」とまで称揚する児玉は山縣有朋や寺内正毅の幾倍も上を行く逸材であったが、日露戦争の総参謀長として非のうちどころのない作戦を展開し、功成って力尽きた概があった。脳溢血で55歳の生涯を閉じたのである。白瀬の落胆は察する余ある。

児玉大将存命でも資金を得られたか否かは不明であるが、孤軍奮闘では北極にも行けない。年齢のこともあってあせっていたであろう。明治42年（1908）９月８日新聞は米軍中佐ピアリーの一行が４月６日北極点に達して無事帰国することを報じた。「報道は、私の耳をうがち、心臓を凍らせた。……失意とそれに伴う数々の煩悶が私の心をさいなんだ。私は遂に北極探検を断念した。そして北極とは正反対の南極に突進しようと欲した」と『私の南極探検記』に書くような、大方針変更をした。当時北極を目指していたノルウェーのアムンゼンも、７年前にも南極大陸に赴いた英国のスコットも南極点到達一番乗りを目指していたので、白瀬も元宮城県知事千頭清臣・前代議士遠藤良吉などの助言で第二十六回帝国議会に「南極探検ニ要スル経費下付請願」を出した。10万円の要求を衆議院は通したが、貴族院では３万円に減らされ、政府は１円も支出しなかった。家族は長男知が海軍兵学校卒業間近であったほかは、夫人とその母、十代の長女・二女・三男、まだ８歳と４歳の三女と四男という構成で仙台に住み、白瀬は東京日々新聞社内にあった「地学協会」の月給20円の事務員として数奇屋橋の角にある印刷屋の二階を月１円50銭で間借りしていた由なので、「断念せんか」と書くことになる。白瀬に同情した静岡県人の村上濁浪なる雑誌社社長が助力者となって、新聞に彼の南極探検の報道を手配し資金を求めていることを知らせた。探検隊書記長になる多田恵一（岡山県）・経験豊かな船長である野村直吉（自称青森県）たちが応募して来たし、朝日新聞が5000円、三井と岩崎が各3000円、秋田魁新報扱い分1371円初め、後援会長に推された乃木大将が会長は受けなかったが、50円など、寄附金も４万円に達した。結局数百人の応募者から隊員10人船員17人が決まったし、後援会長も大隈重信伯爵になり乗船獲得に努めたが、船は仲々手に入らなかった。野村は実は名字は西東で石川県人であった。

あの軍艦磐城が廃艦になり佐世保に繋留されていたのを希望したが、海軍省は貸し下げをしなかった。船が無くて出発できない。８月５日の予定日は15日に延び、９月15日に延びた。更に９月17日になり後援会の幹事会は郡司大尉の「第二報效丸」を譲り受けることにした。先に怨み非難した相手の船を村上濁浪が弁舌によって断る郡司に譲渡を迫る際、「彼は耐えに耐えて低頭した」（渡部『白瀬中尉』）。そして２万5000円で買い受けた。この年３月三重県大湊の造船所で造られ千島の鮭漁から帰ったばかりの帆船に、18馬力の中古蒸気機関を着け、外装も補強はしたが、長さ30メートル、204トン（元は199屯）の小船に厭気がさして隊員も脱落し、朝日新聞も手を引いた。出港予定日に脱会の学術隊員もいた。だが11月28日芝浦で送別式があり３万とも５万ともいわれる人々の壮行を受け、東郷平八郎が『開南丸』と命名した探検船は27人を乗せて翌29日出航した。見送の中にはやす夫人、宮城県立第一高女から宮城師範二部を卒え、附属小の訓導でちょうど奈良女高師に合格した長女ふみこ、さらに二女タケコらもいた。集った７万1800円と借金の１万円が資金であった。

１月後赤道を通過し、明治44年（1911）２月８日午後５時28分ウェリントンに寄港した。貧弱さからか探検ではなくアザラシ猟調査だと疑われたりした。それでも11日出航してロス海まで進出したが、氷海に阻まれ南緯74度16分から戻り、５月１日にシドニーに入港した。ニュージーランドでは猟船かと疑われたが、ここ豪州ではスパイではないかと疑われた。それでもエッジワース・デビッド博士の理解と援助によって再起できた。博士は明治42年英国探検隊の一員として地磁気南極（南緯72度25分）に立った地質学の教授であった。夏を待ち極点到達から科学調査に目的を変更して11

月19日に出航した。中尉が愛刀を博士に進呈したのは、精一杯の謝礼であったのであろう。明治45年（1912）52歳の彼は、１月28日午後零時20分南緯80度５分に日章旗を樹て視界の限りに『大和雪原』と命名した。万年氷原である。南緯80度を越えた探検隊はこれまで、シャクルトン（英）、アムンゼン（ノルウェー）、スコット（英）だけだったので４番目の快挙であるが、船や装備を考えたら奇跡に近いことである。最初予定の馬を積むこともできず、代りの樺太犬も寄生虫で死に、補充はできたものの狭さ故の人間関係上のトラブルも生じた。

帰途ウェリントンに寄港して受取った「勇敢なる隊長及び隊員諸君の無事学術探検を終えられたるを祝す」というデビット博士の祝電の評価が、正に余すところなくそれを示している。３月23日午前３時半の入港を祝電は待っていたのだ。一方無事成功の第一報もここから日本に発信されて、日本国民は24日に初めて知り拍手を送った。後援会は現地撮影の映画で借財その他に対応しようと、写真技師と幹部らをシドニーから郵船の「日光丸」で帰国させ、白瀬らは５月16日横浜に着いた。開南丸は６月20日５万8000キロ１年７ヵ月近い長旅を終え、芝浦で帰着の歓迎を受けた。しかしその歓声が長くは続かなかったのは、７月30日明治天皇が崩御されたことが影響したかもしれない。しかし大正天皇は探検隊一行に2500円を下賜された。御下賜金に言及するのは、開南丸は元の持主に２万円で買い戻されたにもかかわらず、「ざっと四万円、少なくみても二万円ぐらい」（渡部『白瀬中尉』）の借財が、中尉の肩にのしかかったからである。同書は二女タケコの手記を引用しているが「父は極地で写したフィルム一巻を携え、私を連れて全国に映画・講演旅行に赴いた」とあり、さらに十数回も転居したことが述べられている。同書の「関係年表」によると、大正２年に『南極探検』（博文館）を出したが、３年にタケコは青山学院を三年で退学して父に同行する。同６年（1917）父知道が86歳で世を去り、４月の衆議院議員選挙出馬を志したが止め、９年には長男知海軍大尉（パイロット）による空からの両極点突破を提案しながら不発になる。知大尉は父の発想に批判的であったらしい。10年には夫人と共に根室から中部千島に渡り、農商務省嘱託として13年９月下旬まで滞在した。15年には横浜の井上侯爵の別荘番になる。昭和になっても６年（1931）熊本、７年京都、13年には朝鮮というように転居が続く。でもこの間に昭和10年（1935）東京蒲田に住んでいる頃で借財はほぼ片付いたというが、清貧に変りはなかった。

いわゆる軍国思想の高まる中で、南極探検は再評価されて来たのであろう、金浦に「日本南極探検隊長白瀬矗君偉功碑」が文化協会により永井拓務大臣揮毫で建てられ、11年には三宅雪嶺らが「南極探検記念碑」を芝浦埠頭公園に建てた。15年には、『教育勅語』発布50周年に当たり文化の功労者として文部省表彰を受ける。17年には印税などによるという持家を埼玉県片山村に建てることになる。

しかし戦争激化で昭和19年８月18日郷里金浦に疎開する。９月28日町議会は中尉宅建築を決議する。中尉も3000円を町に寄託した。戦局悪化家は建たぬままで20年８月10日空襲で町長宅も被災し、５日後終戦となる。９月26日中尉夫婦は片山村に去った。三男猛一家に戦災親族も住み、翌年タケコと娘の喜子も中国から引揚げて来て食糧難に陥った。１月後二女は栄養失調の父（86歳）を背に母と娘を伴い京都の知合の農家を頼ったが居づらくなり１月余で愛知県挙母町に移った。

金浦に戻ればと思うのにそれができなかったのは、疎開中に三男猛が東京高等商船の出身で英語にも通じているので、進駐軍対策などもある町の助役に当てたらという案があり、中尉はその就任の約束をしていたのに、猛その人が東京で米軍関係の通訳に就職してしまい、違約せざるを得なくなったことで、「武士に二言は」に悖るのを潔しとしない武人白瀬が、金浦に戻らなかったのだと『白瀬中尉』の著者渡部誠一郎氏は語ったが、実は渡部氏は猛の子である潤氏と秋田高校の同級の友人だという。高校生潤は親類の昭和町円福寺から秋田に通学していた由である。南極探検については諸書が詳しく語っている。千島の苦労を特に注視したのは、この体験が、小船であることによって生じた、最悪の白瀬隊長毒殺企図さえ生じたよ

うな逆境を乗切るバネになったと私考するからであり、晩年「困りけり、ああ困りけり、生活難に困りけるかな」とこの英雄が詠まなければならなかったような中でも不屈を貫けたのだと考えるからである。

市川房枝の兄の妻だった長女ふみこが「百歳までは生きられた」と嘆いた食禍が生じた。老雄の克己心も老いたのであろう。挙母町天神（豊田市）の鈴木鮮魚・仕出店二階に間借りした4人は食糧買出苦の日々だったらしい。そして、老中尉は9月4日午前9時腸閉塞のため死去したのである。皮肉にも3日前に何ヵ月ぶりかで白米の御飯を満腹になるまで食べたのが原因だというのである。哀しい話である。

その後3人は横須賀村（吉良町）に移り、夫人は24年に本籍を金浦から移し、2年後79歳で世を去った。夫妻の墓は西林寺にある。金浦にも昭和32年（1957）に分骨された。

昭和60年（1985）金浦町に『白瀬中尉をよみがえらせる会』が発足して、平成2年（1990）《白瀬南極探検隊記念館》を中尉の実弟知行の孫であり、昭和45年（1970）に3人乗りヨットで世界1周を成し遂げた、白瀬京子を初代館長として完成した事実は、故郷が中尉を如何に誇としているかを示す大きな成果であるというべきであろう。

おわりに

このほかの3人の先覚に関し、東海林太郎についての館話の内容は、「生誕100年」の記念顕彰のことに関連して、他の協会の機関誌に掲載することを承認していることと、和井内貞行についても『秋田県博物館等連絡協議会』の安田孝司副会長が館長である「鹿角市先人顕彰館」の記念行事に関連し、10月7日同館において「十和田湖の主　和井内貞行」の演題で、館話と同趣旨の講演をしたことを附記しておく。

ことに、東海林先覚の館話においては、格別演技的や作為的に熱弁型の話し方をしたわけではないにもかかわらず、聴衆の中にハンカチで涙を抑えられる人が、数多く見受けられた。歌謡芸術というものの、愛好家に訴える情緒的感動性というものに、話している者の立場からも認識を新たにした次第である。

また、和井内先覚の場合は、お孫さんをはじめ親類縁者の方々も会場に居られたが、極めて客観的で冷静に評論した部分についても、至って自然に受け止めて頂き、懐しんでも頂けたが、鹿角という地縁に血縁も加わる聴衆の方々に、県立博物館の「館話」なる行事がそれなりの波及的働きかけをなし、然るべき対応を受けたことは、有意義なことであると感じた。

その意味から、今年度、館の行事の「館話」が館内に止まらず、県下に亘って幾許かの為す処があったことを、率直にプラス方向で受け止めて、この報告を終わりたいと考える。